

## 人とつながる

浦野信孝（特定非営利活動法人大阪自然史センター 理事／大阪のコウモリを調べる会）

今年初めて参加させて頂きました、大阪自然史センターの浦野です。子供が小さい頃、大阪市立自然史博物館の友の会に入会し、ハイキングや観察会、合宿などに家族みんなで参加しておりました。子供が大きくなって来るにつれ子供も妻も付いてこなくなり、私一人で参加するのも恥ずかしいなあと思っていた所、何にでも顔と口を出していたからか、友の会の評議員に推薦され、会のお世話をさせてもらうようになりました。さらに友の会を母体としてNPO法人を立ち上げる際には、人数をそろえるためでしょうか、理事にも名前を連ねるようになりました。いわゆる、名ばかり理事です。



仕事は動物病院を開業してまして、主に犬猫の診療をしております。動物のお医者さんというと、動物のことを何でも知っていると思われる人が多いのですが、動物を研究されるのは理学部の動物学科のようところで、獣医学部というのはあくまでも産業動物やペットの犬猫の病気を治すところです。野生動物の知識が多くあるわけではありません。とはいえ、もちろん生き物は何でも好きですので、診療の傍ら、野生動物救護ドクターとして、傷ついて保護された鳥類や哺乳類の、救護活動しております。現在、骨折で飛べなくなったツバメ、片眼の視力を失ったハヤブサを飼育し、家ではタヌキが生活しています。

仕事以外では、コウモリが好きでその調査、研究を10年ほど前から続けています。コウモリというと、みなさん、ああ夕方に飛んでいる、っておっしゃいますが、あれはアブラコウモリという、家に住み着く家屋棲コウモリと呼ばれるもので、私は主に洞穴に住む洞穴棲コウモリを調べています。また、洞穴というと鍾乳洞を思い浮かべますが、大阪にはそういう自然洞穴はありませんので、調べの対象は廃坑、トンネル、導水路、防空壕などになります。

コウモリを調べている人はあまり多くなく、しかも大阪となると記録がほとんど無く、どこをどう調べればいいのか、最初は全然わかりませんでした。まず、メクラチビゴミムシという、小指の先もないほどのゴミムシを調べている人に、いくつかの廃坑を教えて頂きました。名前の最初にあるように、目が退化した、地下生活をしているゴミムシが廃坑内で時々見つかるのです。その種類も地域性が強いものが多く、各地に残っている廃坑の情報を、その虫の研究者はお持ちでした。ついで、ある廃坑では鉱物の愛好家と知り合い、その方から大阪近郊の鉱山の情報を頂きました。また、博物館の学芸員からは地質図をもらい、そこに記載されている鉱山マークをしらみつぶしに調べていきました。さらに、世の中には廃墟マニアという方がたくさんおられ、鉄道や国道の廃トンネルの情報をネットで調べて、順番に見ていきました。

最初は、廃坑というと多田銀山しか思いつくところがなく、同じ場所、同じ廃坑ばかり何度も訪れていましたが、上記の通り、廃坑の情報を集める過程で、虫の研究者と知り合い情報をもらい、鉱物愛好家からも情報を頂き、私のコウモリ研究が飛躍的に進みました。また、現地で廃坑を探す過程ではそこで出会った地元の方と話をし、新しい廃坑や導水路の情報もたくさん頂きました。人とのつながりの重要性を再認識しました。

コウモリの情報が集まるに従い、大阪府の生息状況を公開したり、他の地域との比較の必要から、コウモリ研究者と連絡を取りあうようになりました。それらのつながりから新しい知識を得られるよ

うになり、やはり、人とつながることの大切さを認識しました。

会の名前は「大阪のコウモリを調べる会」としておりますが、実際は兵庫県内の調査地が多くあります。遠くは佐用町三日月、ひとはくの近くでは、藍本にある防空壕を調べています。共生のひろばに参加させて頂いたのをきっかけに、兵庫県のコウモリ好きな方々と、新しいつながりができれば、と思っております。

最初は、コウモリと会いたいためだけに穴を捜して回っていました。そのうち、同じ穴でいつも見る子が同じ子なのか、別の子か知りたくなくて、標識を付けるようになりました。話はそれますが、コウモリの標識は国産ではありません。イギリスの会社から直接購入しています。環境省が山階鳥研に委託して実施している、鳥の標識調査に使う脚輪を作っているのと同じ会社だと思います。こういうものにも、自然史に対する歴史の裏付けが必要なのでしょうか。ちなみに、鳥の脚輪はバンダーに環境省が貸与している形ですので費用がかかりませんが、コウモリの翼帯はどこも貸してくれないので、自費で購入することになります。円高でも、一つ30円かかりました。

コウモリの、季節による洞穴の利用状況のデータや、標識データが蓄積するに従い、それを発表する必要が出てきました。コウモリに負担をかけて調査している以上、その調査結果を公表してコウモリの保護につなげるのが研究者としての義務であろうと思われます。論文を書くにあたっては、文献を集めたり、データを解析する必要が出てきます。ひとはくのように、一般市民の活動に学芸員が深く関わり、調査、分析と一緒に進め、この「共生のひろば」という舞台で発表するやり方は、非常にうらやましい活動です。

実は、コウモリを研究する前は、大阪オオサンショウウオの会という会にも入っていました。こちらは、実際に調査活動に参加しているのは数名だけでした。おそらく、大阪でオオサンショウウオを調べているのはこの会だけで、10年以上の調査実績がありました。データの蓄積もかなりあったはずなのですが、主催されている方が突然調査を中断され、会そのものも、そのまま自然消滅したような形になっています。せっかく何年にも渡ってデータを集めていたのに、それが死蔵される事になって、たいへん残念に思っています。

やはり、こういう自然を相手に仕事なり、研究している以上は、調査を継続すること、その結果を公表することが、自然への恩返しで、義務だと思っています。また、短期間で調査をし、論文化する必要がある大学の研究とは違って、自分のペースでいつまでも気長に調査できるという、いわば素人の利点を生かして同じフィールドを長く見つめ、それをこういう形で発表し、還元していく場をいつまでも続けていくと欲しく思っています。